

中世前期の流刑と在京武士

渡 邊 俊

はじめに

鎌倉幕府を特徴づける重要な職掌に、検断があることは言うまでもない。その職掌のなかでも本稿がとくに注目したいのは、朝廷と同様、幕府も担うようになった京から各地への配流である。

たとえば寛喜三年（一二三一）の鎌倉幕府追加法二二条は、強盗・殺害の余党を鎮西に配流する者として「鎮西御家人在京之輩并守護人」を想定しており、延応元年（一二三九）の追加法一〇一条では、「大番衆并下向人」が京から関東に召人を配流すべきことも定められている¹。つまり京から各地への幕府による配流は、守護や大番衆・在京御家人を通じて執行されていたことがわかる。実際、右の運用を示す事例もいくつか見出されることが明らかにされてきた²。

それでは、このような守護・大番衆・在京御家人の活動に支えられた流刑をめぐる鎌倉幕府法秩序は、いったいどのような歴史的経緯をたどって形成されてきたのだろうか。本稿の目的は、この問題を幕府成立以前の段階にま

でさかのぼって考察することにある。

流刑については、いくつかの先行研究がある³。なかでも幕府の流刑に関しては、佐藤進一氏が流人の管理・護送を守護が担っていたことについて指摘しており、その後、海津一朗氏の研究によって、幕府による流刑の詳細が明らかにされた⁴。海津氏の研究によれば、流刑やそれともなう流人雑事に関する負担が関東御公事とされ、それは守護・地頭や在地に課せられていたという。また、流刑の対象が非御家人・凡下にまで及び、対象となる犯罪については殺害・盗を含むことなども明らかとなった。先行研究をふまえるならば、幕府の流刑は、身分・犯罪のいずれの面においても朝廷の流刑よりも対象が広いといえる。したがって多くの流人が、幕府の手によって京から各地へ流されたことは想像に難くない。

ところで、先にふれた追加法二二条・一〇一条に示される幕府による流刑は、当然のことながら、京と各地とを往来する武士の活動があつてはじめて成り立ち得るものである。また、武士の上洛・在京・下向を前提としている。この京を結集の核とする広域的な武士の移動状況については、武士に関する研究がとくに注目している点である。

東国武士が、滝口・武者所・女院侍所・内裏大番役に関わる在京活動を展開して中央権力と深いつながりをもっていた事実については、野口実氏の研究が明らかにしている。また、川合康氏は、院政期における武士社会内部の地縁を超えた広域的な移動の諸相と、移動により形成された武士間の人的ネットワークについて明らかにしている。さらに、京への出仕、内裏大番役、女子の婚姻関係、亡命・流刑、の四点が武士の移動を促す契機となっていたことを指摘した上で、その移動と交流とによって培われた武士相互の人的ネットワークが、治承・寿永内乱での戦後処理に影響をあたえた点についても論及している。

このように、鎌倉幕府成立以前から、武士による都鄙間交通や活発な在京活動がみられることが次第に明らかとなってきた。東国の農村に自生した武士がやがて京の貴族社会を圧倒していくといった単線的な構図は、過去のものになりつつある。高橋昌明氏や元木泰雄氏、そして近年の長村祥知氏の研究ともあいまって、武士論に占める京の位置はますます高まっているといえよう。

先行研究が明らかにしてきた通り、広域的な武士の移動や武士による在京活動は、治承・寿永内乱期以前にすでにみられていた。それはすなわち幕府流刑の前提となる条件の一つである、京を結節点とした武士の移動状況が、内乱期以前の段階ですでに用意されていたことを意味する。流刑をめぐる鎌倉幕府法秩序の形成についての考察を目的とする本稿が、幕府成立以前の段階にまでさかのぼって検討する理由は、まさにこの点にある。

以下、治承・寿永内乱期以前の武士社会の動向を幕府が自身の下に整序するかたちで、流刑に関する鎌倉幕府法秩序が形成されていく様相について、流刑と武士との関係に検討の焦点を定めて考察していきたい。

第一章 配流と在京武士

『禁秘抄』「配流」の項が「罪沙汰近流遠流次第有^レ之、檢非違使向^二彼家^一、或具^二武士^一被^レ遣^レ之」と説明するように、鎌倉期においては、朝廷の流刑を実行に移す者として檢非違使のほかに武士の存在があった。それでは朝廷の流刑に、檢非違使とその従者とは別に、武士が関与しはじめるのは、いったい何時ごろからであろうか。まずは、この点を確認する作業から考察を開始したい。¹¹

1 朝廷の流刑と武士

治承元年（一一七七）五月二十一日、座主快修の追放や強訴の罪を問われた天台座主明雲は、座主職を解かれた後、伊豆への配流が決定された。¹²だが、伊豆へとむかう途中、延暦寺大衆によって明雲の身柄は奪還されてしまう。この配流に際して、護送の任にあたることとなったのが武士であった。史料をみてみよう。

【史料一】『玉葉』治承元年五月二十三日条

頼政朝臣知^二行伊豆国^一、仍下向之間、可^レ付^二国兵士^一之由、去夜半被^二仰下^一、然而殊恐^二山僧濫行^一、可^二守護^一之旨不^レ被^二召仰^一云々、仍遣^二異様郎徒一兩、敢不^レ存^下可^二奪取^一之由上云々、今日召^二頼政^一、有^二勘責之仰等^一云々、

配流国である伊豆の国主であった源頼政に、明雲護送にあたる「国兵士」の動員が院より命じられていることがわかる。また、頼政の消極的な姿勢が、大衆による明雲奪還を招いたとして頼政が院より譴責されていることもまた判明する。

かねてより延暦寺大衆による明雲奪還は噂にのぼっていた。そのため、監視体制を強化すべく、検非違使尉であった平兼隆が明雲を警衛するよう院宣が下され、領送使についても検非違使尉を登用する手はずであった。さらに万全を期すべく伊豆国主源頼政にも、「国兵士」の徴発と警衛とが命じられたのである。それでは配流時の実際は、どのような態勢であったのか。『清解眼抄』所引「後清録記」によると、追使の役目を負った検非違使志の中原重成のほか「国兵士」が五または六騎ほどその任にあたっていたという。おそらく【史料1】にみえる源頼政が派遣した郎等も、その中に含まれていたことだろう。

このように、十二世紀後半より朝廷の流刑執行の一部分を武士が担いはじめるのである。それでは当時、具体的に朝廷の流刑はどのような手続きを経て執行されていたのだろうか。朝廷の流刑執行過程に占める武士の役割・位置を明確にしておきたいので、ここで朝廷による流刑の全体像を把握しておきたい。次の史料は、藤原成親配流の事例である。

【史料2】『兵範記』嘉応元年（一一六九）十二月二十四日条

流人事仰^①官外記、権中納言資長、修理大夫成頼、少納言定宗参入、次下官仰^②中納言云、権中納言藤原朝臣成親、左衛門尉藤原政友解^③却見任、成親除名追^④位記^⑤令^⑥配^⑦流備中国、政友賜^⑧獄所^⑨、次上卿召^⑩外記^⑪被^⑫仰^⑬解官事、次召^⑭下官^⑮被^⑯仰^⑰除名追位記配流官符事、^⑱下官仰^⑲大夫史、即覧^⑳領送使差文、次成^㉑官符、下官加判、次修理大夫少納言等向^㉒結政^㉓請印、次給^㉔領送使、次仰^㉕検非違使志章貞、是追使也、（中略）

太政官符備中国、

流人藤原成親、

使左衛門少志葛原友弘、従三人、

門部二人、 従各一人、

右為_レ領_二送流人藤原成親、差_二件等人_一、発遣如_レ件、国宜_二承知依_レ例行_二之、路次国々宜_レ給_二食漆具馬三疋_一、符到奉行、

正四位下行権右中弁平朝臣 修理左宮城判官正五位下行左大史豊前介小槻宿禰

嘉応元年十二月廿四日

「下官」すなわち『兵範記』記主である平信範はこの時、頭弁であった。まずは藏人である平信範が上卿の権中納言藤原資長に対して、成親の解官・除名・配流の旨を宣下する（傍線①）。次に、宣下された内容を上卿が、解官については外記に、除名・追位記・配流については弁官である信範に、それぞれ官符作成とあわせて命じる（傍線②）。上卿の仰せをうけた弁官は、大夫史に命じて領送使の差文を確認する（傍線③）。続いて弁官が、配流官符を作成し、官符に加判した上で、参議・少納言等が請印をおこなう（傍線④）。続いて、発給された配流官符が領送使に渡されるときともに、追使となる検非違使が指名される（傍線⑤）。

『清辨眼抄』によれば、陣座にて「流人交名」を受領した追使の検非違使が、流人宅で罪人を捕縛し、西国への配流であれば七条朱雀へとむかい、東国北陸道への配流であれば栗田口へとむかい、そこで配流官符を持参した領送使と対面するという。検非違使は、いったん領送使から配流官符を受け取って流人に読み聞かせた後、流人とともに配流官符を領送使へ渡し、領送使が配流官符を携帯して流人を配流国へと移送する、というのが正式な執行手続きであった。¹⁵

当該期の朝廷による流刑の全体像は右の通りである。武士は、朝廷による流刑執行手続きの最終段階、すなわち流人領送の部分に関与しはじめると理解できるだろう。延慶本『平家物語』「文学伊豆国へ被_二配流_一事」によれば、文覚が伊豆へと配流される際、院宣により伊豆守源仲綱が護送の任にあたり、さらに仲綱の郎等である渡部省、そして当時上洛中であった伊豆の近藤七国平も護送に加わったという。¹⁶近藤七国平は、野口実氏が指摘しているように在庁かつ頼政・仲綱の郎等のような存在であったとみられる。¹⁷明雲配流時に、院より動員が命じられた【史料1】

にみえる「国兵士」とは、ここである在京中であつた近藤七国平のような存在を指すのかもしれない。

十二世紀後半より武士は、検非違使によって実行されていた朝廷の流刑を補完するかたちで参画しはじめるが、その背景には、武士を直接動員できる院権力があつたと考えられる。

2 在京武士による配流

ところで、在京活動を展開していた武士が、流人の身柄を引きとって本国へと下向する在り方もみられる。はじめに掲げるのは、千葉常胤に関する史料である。

【史料3】『吾妻鏡』治承四年（一一八〇）九月十七日条

父義隆者、去平治元年十二月於天台山龍華越、奉_レ為故左典廐_レ命、于_レ時頼隆產生之後、僅五十余日也、而被_レ処_二件縁坐_一、永暦元年二月、仰_二常胤_一配_二下総国_一云々、

永暦元年（一一六〇）二月、源義朝の従者として平治の乱で戦死した父の義隆に連座して、源頼隆が下総へ配流されたことがわかる。さらにこの配流が、「仰_二常胤_一配_二下総国_一」とあるように、千葉常胤が頼隆配流を命じられ、その常胤が本拠地である下総国に頼隆を配流したことも確認できる。

常胤による頼隆配流と同時期には、源頼朝・源希義も検非違使によってそれぞれ伊豆・土佐へと配流されている。¹⁸周知のように頼朝と希義は、平氏の本拠地であつた六波羅に一旦、その身柄を拘束された¹⁹後、平氏の手によってではなく検非違使を介した朝廷の流刑手続きにより処分された。頼朝・希義の動向をふまえると、おそらく頼隆も、頼朝・希義と同様、六波羅に捕虜として拘束されていたとみられる。それが、やがて頼朝等とともに検非違使へとその身柄が引き渡されたのだろう。杉橋隆夫氏²⁰が指摘しているように、頼朝等に対する制裁権を一次的に握っていた平清盛が、頼朝等の処分を検非違使を通じて朝廷による処分に最終的に委ねたとみるべきである。

ただし頼隆は、頼朝・希義とは異なるかたちで配流されることとなった。朝廷の「流人交名」に載せられた頼朝と希義は検非違使の手によって配流されたが、「流人交名」には載らなかつた頼隆は、千葉常胤の手によって下総国

に配流されたのである。²¹そこで、あらためて【史料3】の「仰^二常胤^一配^二下総国^一」について考えてみたい。問題となるのは、永暦元年二月に常胤と頼隆の両者を結びつけた状況である。残念ながら、この点を明らかにし得る史料が無く、詳しくはわからない。ただし、推測する手立てはある。

注目したいのは、頼隆配流当時の常胤の動向である。この頃、常胤は、源義宗との間に生じた相馬御厨の領有をめぐる相論を展開していた。伊勢の権禰宜荒木田神主に進上した永暦二年（一一六一）四月一日の常胤申状案²²には、次のような記述がみえる。

然而猶義朝謀叛之故、自^二国衙^一被^二没収^一候畢、雖然非^二彼朝臣所知^一之由、證文顯然候之上、如^レ本可^レ被^レ奉^レ免^二立券^一候之旨、去年^{（秋カ）}献^二之比、自^二守殿^一依^下被^二仰^上下^一候、在^レ庁令^レ実^二檢地頭^一之後、于^レ今無音、為^下令^レ散^二不審^一候、去^上之比參上仕、尋^二承子細^一候之處、国吏裁定不^レ早候之歟、因^レ之令^レ訴^二申権門^一候之間、自^二右大臣殿^一可^下令^二計沙汰^一給^上之旨、所^下被^レ仰^二下祭主殿^一候上^也、

相馬御厨が源義朝の所領とみなされたために国衙から没収される憂き目に遭った常胤は、事態の打開をはかるべく、まずは下総守であった源有通²³に働きかけた。平治元年（一一五九）末の義朝の没落を考えれば、この働きかけが、永暦元年の早い時期に開始されたものとみてよいだろう。だが、事は上手くは運ばない。いったんは功を奏したかにみえたが、結局、埒が明かずに常胤は、今度は国守ではなく権門に直接働きかけることとなったのである。申状の内容からすると常胤自身が、この頃、訴訟活動のためにおそらく在京していたのではないだろうか。

したがって【史料3】の「仰^二常胤^一配^二下総国^一」は、常胤在京中の出来事であると解釈できないだろうか。つまり平治の乱後に惹起した相馬御厨の収公問題や源義宗との相論への対応のため、常胤が下総と京とを往来しており、その在京中に、検非違使の側から頼隆の身柄を常胤が引き受けたものと推測されるのである。

仮に右のように解釈できるとした場合、頼朝・希義配流時の検非違使別当が藤原実定²⁴であった事は示唆的である。なぜなら常胤が頼った権門が、まさに実定の「家」である徳大寺家であったからである。常胤の依頼を受けて伊勢祭主への口入をした「右大臣殿」とは藤原公能²⁵のことであり、その公能は、実定の父にあたる。多分に推測の域を

出ないが、常胤と徳大寺家との何らかの関係が、伊勢祭主への口入のみならず頼隆の身柄引き受けの背景ともなっていた可能性を指摘しておきたい。

在京活動を展開している武士が、流人の身柄を引き受けて配流先へと下向している事を示唆する事例は他にもある。川合康氏²⁶がとりあげた延慶本『平家物語』にみえる土肥実平の例である。

【史料4】延慶本『平家物語』「土佐房昌春之事」（二一十一）

大衆弥蜂起シテ訴申間、昌春ヲ公家ヨリ召ニ、敢テ勅ニ不^ガ從^ハ、時ニ別当兼忠ニ仰テ、御聖断有ベキ由、昌春ニ被^レ仰下^一、就^レ之昌春令ニ上洛^一之処ニ、即兼忠ニ仰テ昌春ヲ召取テ、其時大番衆、土肥二郎実平ニ被^レ預^ル、月日ヲ送ル程ニ土肥二郎ニ親ク成タリケルトカヤ、随テ又公家ニモ御無沙汰ニテ御坐シケリ、

【史料5】延慶本『平家物語』「謀叛ノ人々被^レ召禁^一事」（二一二十二）

近江入道蓮浄ヲバ土肥二郎実平預テ常陸国へ遣ハス、

【史料4】では、櫛を切り捨て、興福寺衆徒に狼藉をはたらいた昌春の罪を大衆が朝廷に訴え、昌春が朝廷に召喚されたことがわかる。また、検非違使別当平時忠を指すとみられる「別当兼忠」²⁷が、大番衆の土肥実平に昌春の身柄を預けたこともわかる。すなわち、大番衆として在京していた土肥実平が預人となったのである。その後、昌春は関東へと下っていった。さらに【史料5】によれば、いわゆる鹿ヶ谷事件で罪を問われた近江入道蓮浄を、在京中の土肥実平が預かった上に常陸へ流したとする。

なお、『仲資王記』安元三年（一一七七）六月三日条によれば、俊寛や近江入道等は、八条の平氏の邸宅に召籠められた上に「武者」に預けられたという。²⁸ここでいう「武者」が土肥実平であったのか否かについては、実平と平氏との関係について示唆する材料を他に見出せないため、残念ながらわからない。しかし、先にみた千葉常胤の例や、上洛中であつた近藤七国平が文覚の伊豆配流に同行した例、さらに大番役を終えた北条時政が流人平兼隆とともに伊豆へ下向したといわれている例²⁹などを勘案すると、在京活動を展開した武士が流人をともなつて本国に下向する在り方を認めてもよいと考える。

延慶本『平家物語』にみえる土肥実平の活動をふまえ川合康氏は、『囚人預置』の拘禁刑は、京においては検非違使が預かり人となるのが普通であるが、この記事は大番衆がその任務を補完する場合のあったことを示唆している。『平氏権力のもとでの土肥実平の在京活動と、大番衆の幅広い役割を窺うことができる』とそれぞれ指摘している。³⁰ 武士と流人とを結び付けた契機とは、武士による在京活動であったと考えられるのである。

第二章 平氏による私刑としての配流

前章においては、朝廷の流刑に武士が関与しはじめる様相や、在京活動を展開していた武士が流人の身柄を引き取って本国へと下る様相が、遅くとも十二世紀後半よりみられることを確認した。しかし、武士が流刑に関与するのは、前章にて示した場合のみではない。当該期の特徴として看過できないのは、平氏が独自に流刑を科している例がみられる点である。この朝廷の流刑とは別系統で執行されていた、いわば平氏による私的制裁ともいえる配流事例を検出・検討することで、治承・寿永内乱期以前の、武士と流刑との関わりについての考察をさらに深めていきたい。

治承元年（一一七七）六月、鹿ヶ谷事件によって、権大納言藤原成親は配流・殺害された。この藤原成親に科された一連の処分については、平氏による私刑が行使されたものとして、広く注目を集めてきた。たとえば義江彰夫氏は、成親に対する処分を「朝廷裁可を経ずに先に執行され、独自の刑罰としての性格がつよい」と評価した。³¹ また、上横手雅敬氏は「成親に対する処分を見ると、解官は公的処置であるが、殺害はもとより、解官に先立って行われた流罪もまた私刑であった」とする。³² 同じく元木泰雄氏も、「成親を解官もしないままに備前国に配流し、同地において殺害」、「平清盛が現職の権大納言という高官を、私刑によって殺害」とそれぞれ述べている。³³

このように先行研究は、藤原成親の配流・殺害を、朝廷の正式な手続きを経ない平氏による私刑とみなしてきた。その根拠の一つを次に掲げる。

【史料6】『玉葉』治承元年（一一七七）六月十一日条

余問云、成親卿無_二停任_一如何、申云、是禪門依_二私意趣_一、遂_二其志_一、仍自_二公家_一不_レ被_二停任_一、於_二自余之輩_一者、自_レ上有_二御沙汰_一云々、

大夫史であつた小槻隆職から藤原兼実にもたらされた情報によれば、成親については停任の手続きを経ていないという。成親に対する一連の処分は、「私意趣」すなわち平清盛による裁量によつておこなわれていたからであつた。成親が正式に解官されたのは六月十八日のことであつたが、成親自身は六月二日の時点ですでに、配流先の備前へと下つていた。³⁴つまり配流は、解官以前に執行されていたのである。

成親に対する一連の処分が、平清盛の裁量によつておこなわれた私刑であつたことは、【史料6】およびその関連史料から明らかである。先行研究の指摘の通りである。

それでは、この私刑としての配流は、具体的にどのような方法でおこなわれたのだろうか。残念ながらこの点を、一次史料から明らかにすることができない。しかし、延慶本『平家物語』や『源平盛衰記』には、配流から殺害までの経緯が、事細かく記されている。

延慶本『平家物語』によれば、成親護送に際しては、平氏家人であつた難波経遠が選ばれ、成親の身柄は経遠の所領近くの備前国児嶋へ流されたことがわかる。³⁵『源平盛衰記』「成親卿流罪事」が、経遠を「預武士経遠」と記しているように、経遠は成親の預人であつた。また、成親だけではなく子息の成経も父と同様、配流されることとなつたが、その任にあたつたのが平氏家人の妹尾兼康であつた。兼康も経遠と同様、預人としての役割をはたしている。しかも成親の時と同じく、成経は当初、兼康の本拠地と考えられる備中の妹尾に配流されることが予定されていた。³⁶注目されるのは、『玉葉』も、成親配流に際して武士が護送の任にあたつたとして³⁷いることである。その武士とは具体的には、延慶本『平家物語』などによると難波経遠や妹尾兼康といった平氏家人であつた。³⁸また、家人の所領やそれに近い場所が配流地に選択されていたこともわかる。

成親の例をふまえると、平氏による私刑としての配流は、平氏家人制によつて支えられていたと理解できる。そ

れでは成親配流のほか、平氏による私刑とみなせる配流はなかったのだろうか。以下、この点について史料を掲げて検討していく。

【史料7】『玉葉』養和元年（一一八一）十月八日条（一）は割注）

或人云、相少納言宗綱法師於「前幕下許被_レ糺問」之処、申_二宮在所不_レ知之由_一、但慥御見存之由_二所_レ承也云々、其後預_二賜左衛門尉定頼_一「貞能子」遣_二備中国_一了云々、

相少納言宗綱とは、藤原宗綱のことである。以仁王の乱後に南都へ逃亡しようとしていた宗綱は、一旦は捕えられたものの、かつての舅であった源資賢のもとに出入りしていたという。結局、平宗盛が派遣した武士の追捕に遭い、資賢のもとから捕縛・移送され、このたびの宗盛による尋問となった。⁴⁰

【史料7】によれば、宗綱は平氏家人であった平貞頼に預けられた後、備中へ配流されたことがわかる。当時、以仁王の乱および源頼朝の関係者とみられる人物の搜索が平宗盛の主導によっておこなわれており、たとえば『玉葉』治承四年（一一八〇）十二月六日条によると、中原親能を捕縛するためにその主人であった源雅頼第が追捕されている。その任にあたつたのは平時実であったが、『玉葉』同日条はこの一件につき「後聞、納言家狼藉事非_二使庁之沙汰_一、只前幕下之下知云々」と明確に記している。宗綱も、宗盛主導のもと、先にみた成親の例を勘案すれば平氏家人制を通じて備中へ配流されたものと考えて間違いない。『玉葉』はふれてはいないが、おそらく成親の時と同様、備中の妹尾兼康が護送・監視にあたつたものと推察される。

【史料8】『玉葉』文治二年（一一八六）正月二十三日条・二十四日条（一）は割注）

上総者時家「時実弟」配流国歟、（二十三日程）

彼時家弟全無_二配流之儀_一、只故平禪門私所_レ遣云々、（二十四日程）

平清盛が、平時実の弟である時家（時忠の子）を上総国へ流していることがわかる。この配流は、「私所_レ遣」すなわち、私刑によっておこなわれたこともまた明確である。継母の「結構」によって配流された時家は、上総広常に賞翫され、やがて広常の婿となったという。⁴¹この時家については、治承三年十一月の政変時に解官された者のな

かに「右近権少将伯耆守平時家」としてその名がみえるので、治承三年十一月に解官後、上総国へ配流されたことになる。治承三年十一月の政変では、藤原基房や平業房が配流されたが、朝廷が公的には把握していない私刑としての配流がこの時、平氏によって実際におこなわれていた。私刑として配流された場合、朝廷の「配流輩注文」・「流人注文」⁴³には記載されないため、朝廷側が把握する流人には数えられない。兼実が「無配流之儀」としているのは、時家が、「注文」には記載されない私刑によって配流された流人であったことを端的に示している。なお、時家配流の際、その護送にあたった人物についてまでは、よくわからない。朝廷による配流ではないとすれば、やはり平氏の家人が護送の任にあたったものと推測される。あるいは前掲【史料4】【史料5】にみえる土肥実平のような存在が、東国への配流に関与した可能性も無きにしも非ずではあるが、この点は断案を得ない。

管見の限り、一次史料から確認できる平氏による私刑としての配流は、現時点では藤原成親、藤原宗綱、平時家の例くらいしか検出できない。ただし軍記物にまでその検討対象を広げるならば、たとえば平氏家人の伊藤忠清を上総へ配流した事例も追加することができ、それは平氏一門・家人に対する私刑としての配流であったと評価できる。⁴⁴ 一門・家人に対する私的制裁は、当時、一般的にみられ、たとえば六波羅に出入りしていた民部大夫正家を「虚言」によって清盛が追却したり、右に示した平氏家人の伊藤忠清を上総へ配流したりといった例や、先述の平時家に対する処分がそれにあたる。⁴⁵ ただし藤原成親や藤原宗綱への平氏による配流処分は、明らかに主人権の範囲を逸脱している。平氏による私刑としての配流は、一門・家人だけでなく、自己と敵対する者に対して主人権をこえて執行されている点、やはり注目せねばならない。また、平氏による私刑としての配流が、自己の家人によって支えられている点についても注目しておきたい。

第三章 鎌倉幕府御家人制と配流

これまで治承・寿永内乱期以前の十二世紀後半を中心に、院により動員された武士が朝廷の流刑を補完する例や、

在京活動を展開していた武士が流人をもなつて下向する様相、そして平氏による私刑としての配流に家人が動員されている事例をみてきた。

ここで、これまで考察してきた武士の流刑への関与の仕方を、次の三点にまとめておきたい。

- ① 院から動員されて検非違使を通じた朝廷の流刑を補完する
- ② 訴訟や大番役などによる在京活動中に流人の身柄を引き取って本国に下る
- ③ 平氏家人として平氏による私刑としての配流を担う

流刑という観点からみた場合、鎌倉幕府の成立は、右に示した①～③とは異なる新たな状況をもたらしたといえる。それはすなわち、鎌倉政権が、全国政権としてその体制を確立していくにつれて、一般重犯に対する流刑をも組織的・体制的に科しはじめた点である。本稿「はじめに」でもふれたが、佐藤進一氏や海津一朗氏によつて明らかにされてきた通り、幕府は、非御家人・凡下にまで流刑を科しはじめる。⁴⁶それを担ったのは、幕府御家人制であつた。しかし幕府の流刑が、前代とは異なる新たな右の性格を生み出したからといって、先に掲げた①～③とはまったく無関係に幕府の流刑が形成されたわけではない。むしろ、①～③の要素を継承しながら、幕府の流刑が制度として形成されたとみられる。

以下、一般重犯をも対象とする鎌倉幕府の流刑が形成されていく様相について、治承・寿永内乱期以前に築かれた①～③との関係性に留意しながら、検討していきたい。

1 夷島配流の成立と朝廷・幕府

本来、京内での一般重犯に対する日常的な処分を担っていたのは検非違使庁であつた。それは平氏政権下でも同様であつたとみられる。先に掲げた③の対象者は、平氏一門およびその家人あるいは平氏に敵対する、いわば政治犯に限られ、京内の一般住民を対象にしたものではない。平氏による使庁の掌握はすすめられたとはいえ、京内での殺害犯や盗犯に対する日常的な対応については、やはり一義的には平氏ではなく使庁が担当していたものと思わ

れる。⁴⁷ さらにいえば、そもそも使庁が専権的かつ自己完結的に流刑を執行することもなかった。⁴⁸

だが、建久年間に至ると、新たな配流の方式が朝廷と幕府との交渉の末に成立する。それは夷島配流である。幕府の流刑が、朝廷・使庁による刑罰を補完するかたちで一般重犯をも対象としはじめる画期であった。

この夷島配流に深く関係する、在京御家人による洛中警固の実態と、幕府側による使庁からの罪人請取制の成立・展開については、森幸夫氏の研究に詳しい。⁴⁹ 森氏が述べるように、京中での幕府による罪人請取は、建久二年（一九一）からはじまる。この年、京中強盗十人が検非違使の手から幕府の側へその身柄が渡され、関東より夷島へと配流された。⁵⁰ この建久二年の配流以降、幕府による夷島配流が定着していくのである。

夷島配流の成立によって、京と東国そして夷島へと至る配流の道筋が新たに築かれた。これは一般重犯の流刑を、組織的・体制的に鎌倉幕府が担いはじめる画期であるとともに、朝廷の刑罰体系を補完する、まさに前掲①と類似の性格が、幕府にも生じたと評価できるだろう。

ところで、右に関連して注目されるのは、建久二年とほぼ時期を同じくして、大番役が御家人役として成立したとみられることである。幕府発給の下文は、美濃国の家人等に対して大内惟義の催促に従って大番役を勤仕するよう命じるとともに、「就中、近日洛中強賊之犯有^レ其間、為^レ禁遏彼党類、各企^ニ上洛、可^レ勤^ニ仕大番役、而其中存^下不可^レ為^ニ家人^一之由者、早可^レ申^ニ子細^一」とも命じていた。⁵¹ 多くの論者がとりあげてきた、御家人役としての大番役が確立したことを示す史料である。大番役勤仕が、御家人と非御家人とを区別する基準となり、御家人制の整備に一役かっていた。⁵² 森氏が「この政所下文は、美濃国御家人が守護大内惟義に従い京都大番役を勤仕するともに、洛中群盗の鎮圧にも駆使されることを示しているのである」と指摘しているように、大番役勤仕は御家人にとって、洛中警固の負担をも意味した。その背景に、京畿・諸国に跋扈する「海陸盜賊并放火」の取締りを源頼朝に命じた、頼朝の諸国守護権が明確化した建久二年新制があることは間違いない。⁵⁴ 大番役の御家人役化と、京中罪人の身柄請取制・洛中警固とは、群盗問題を軸に密接に連動していたのである。

大番役負担者が御家人に限定されたことのもつ意味は、幕府による流刑を考える上でも、やはり大きい。治承・

寿永内乱期以前、大番役勤仕の武士が京から各地への配流を担っていた可能性を第一章にて指摘した。すなわち前掲②にあたる性格である。この大番役を負担する者こそが御家人であるとするならば、京から各地への配流を担う者として後の追加法に定められる大番衆も、当然のことながら御家人に限定されることになる。つまり御家人役としての大番役の確立は、京から各地への配流が、御家人役の一環として幕府体制の下に位置づけられるようになることをも意味したと捉えられる。

このように建久年間以降、夷島配流の成立や御家人役としての大番役の確立を経て、幕府の流刑が徐々に整備されていった。その一方、この幕府の体制を朝廷の下に再編する動きも同時にあらわれはじめていた。それを主導したのは後鳥羽院である。

そもそも群盗対策を主とする洛中警固体制は、京都守護や、佐々木・大内などをはじめとする畿内近国守護によって動員された武士たちによって担われていた。また右にみたように大番役の一環でもあった。これら洛中警固にあたる在京御家人や武士たちを、検非違使に任官したり、院北面・西面に組織したりしながら、後鳥羽院が自らの下に位置づけていった点については先行研究が指摘してきたところである。⁵⁵ この先行研究の指摘に関連する史料を次に掲げる。

【史料9】『華頂要略』正治二年（一二〇〇）六月二十三日条（第六十四代法印弁雅。（一）は割注）

依_二山門訴申_一、大理公繼卿被_レ停_二左衛門督檢非違使別当_一、官人能宗処_二遠流_一（「隠岐国」、同息男左衛門尉隆景并春宮坊帶刀重宗各解_二却見任_一、召_二取日吉神人_一之使_二庁下部七人_一（准_二強盜犯_一）遣_二関東_一、可_レ移_二夷島_一之由宣下云々、

【史料10】『明月記』建仁三年（一二〇三）十二月二十日条

久清弟久種於_二日吉勝負_一遅々依_二勘当_一、付_二久清_一被_レ召、俾_レ病隠居、欲_二召出_一之間、拔_レ刀突_二兄郎等男_一、遂擲進被_レ下_二御廐_一、忿怒之余以_レ火烧_二切本鳥_一、件男可_レ遣_二東夷_一云々、

【史料9】は、大津神人を刃傷し、かつ禁獄に処したことにより山門の訴訟を招き、当事者が処罰されることと

なった事件を記している。この時、神人を捕縛した使庁下部七人を「強盜犯」に准じて関東へ送り、夷島へ配流する旨を宣下した点が重要である。「強盜犯」に准じたかたちでの夷島配流は、明らかに先にふれた建久二年の先例を踏襲したものである。しかも、この幕府を介した夷島配流を命じる実質的主体は後鳥羽院であった。すなわち後鳥羽院は、従来の朝廷配流の在り方に加えて、「強盜犯」およびそれに准じると判断した犯人をも夷島配流に処すことのできる体制を、洛中警固に従事してきた在京御家人と幕府とを利用することで築いたともいえる。一方の【史料10】によれば、後鳥羽院臨席のもと開催された日吉社競馬で失態を犯した久種⁵⁶を、御厩に拘禁した後、「東夷」に預ける旨を後鳥羽院が命じている。【史料9】【史料10】の両者から判明するのは、関東への引き渡しを、刑罰体系の一部として自己の下に組み込んでいる後鳥羽院の姿勢である。

建久年間の幕府側による使庁からの罪人請取制の成立は、一般重犯の流刑に幕府が関与しはじめるという意味において、画期であった。平泉藤原氏を滅ぼして夷島への重犯の配流を可能なものとするまでにその支配領域を拡大させ、かつ在京御家人や大番役を通じて洛中警固体制を確立した幕府の機能は、やがて後鳥羽院により吸収・再編されはじめる。その過程において幕府を介した夷島配流は、あらためて朝廷刑罰体系の一部として位置づけられたのであった。

2 「召人逃亡の科」の成立

治承・寿永内乱期以前から、とくに東国への配流に関しては、在京活動を展開した武士が流人の身柄を預かり、本国へと配流していた点については第一章にて指摘した。その後、建久年間における頼朝の諸国守護権の明確化、群盗対策を契機とする夷島配流や大番役の確立により、京と東国そして夷島とをつなぐ配流の道筋とそれを担う者とが幕府によって定められはじめると、今度はその体制を後鳥羽院が自らの下に吸収・再編するに至った点は前節にて述べた通りである。

承久の乱後、六波羅探題の成立を経て、京から各地への幕府による配流は、御家人によって日常的・組織的に執

行できるまでにその体制が整備されていたと考えられる。この点をうかがうことのできる鎌倉幕府追加法のいくつかを、以下にそれぞれ掲げてみよう。

【史料11】寛喜三年（一二三一）四月二十一日付、追加法二二条。

一 強盜殺害人事、於張本^一者、被^レ行^一斷罪、至^一余党^一者、付^一鎮西御家人在京之輩并守護人、可^レ下^一遣鎮西^一也、（後略）

【史料12】文暦二年（一二三五）七月二十三日付、追加法八六条。

一 犯人斷罪事

右、為^一夜討強盜之張本、所犯無^一遁方^一者、可^レ被^一斷罪也、是則為^レ相^一鎮傍輩向後^一也、其外至^一枝葉之輩^一者、可^レ召^一進^一關東、可^レ被^一流^一遣夷島^一也、

【史料13】延応元年（一二三九）四月十三日付、追加法一〇一条。

一 所召置^一京都犯人事

付^一大番衆并下向人之便宜、可^レ被^一下^一進^一關東也、（後略）

【史料14】延応元年（一二三九）七月十六日付、追加法一一七条。

一 重科輩被^一放免^一事

右、於^一輕罪之輩^一者、被^レ行^一赦免^一之時、縱雖^レ被^一免^一之、至^一重犯之族^一者、可^レ有^一御計^一歟、所以者何、傍輩無^一懲肅^一者、惡党増^一人数^一歟、自今以後、強盜并重科之輩、雖^レ被^一禁獄^一、申^一出其身^一、可^レ被^一進^一關東^一之状、依^一仰執達^一如^一件、

【史料11】では鎮西御家人・在京御家人ならびに守護人を、【史料13】では大番衆ならびに京より關東へ下向する御家人を、鎮西・關東それぞれに配流する役目を担う者として定めている。両条については、本稿「はじめに」においてふれた。さらに【史料12】をみると、夜討・強盜の張本以外の者たちが關東を通じて夷島へ配流されることがわかり、さらに【史料14】では、獄中から重犯を引き取って關東に下すよう六波羅探題に指示を出している。

その一方、配流を担う御家人の過怠すなわち罪科規定も、同時に整備されていたことも見逃せない。

【史料15】寛喜三年（一二三二）七月評定、追加法三四条。

一 所_二預置_一召人令_二逃失_一罪科事

右、預_二置謀叛人_一之處、其召人於_レ令_二逃失_一者、依_レ為_二重科事_一、可_レ被_レ召_二所領_一也、其已下者不_レ可_レ処_二罪科_一、随_二輕重_一可_レ被_レ行_二過怠_一、所謂寺社修理等是也、（後略）、

【史料16】天福元年（一二三三）八月十五日付、追加法六一条。

一 大番衆令_レ逃_二失召人_一事

右、召人出来之時、令_レ預_二大番衆又在京輩_一處、令_二逃失_一畢、然而其科怠輕重依_下難_二定申_一候、于_レ今不_レ致_二沙汰_一候之間、或強盜、或殺害人、大略十之八九、令_二逃失_一候也、為_二自今以後、尤可_レ被_二定下_一候歟、

押紙云、可_レ令_レ修_二造清水寺橋_一也、

【史料15】【史料16】ともに、召人を逃がした際の、寺社関係の修理費用を捻出させる過怠を定めた罪科規定である。このように「召人逃失の科」という罪科規定が成立してくることは、換言すれば、幕府による配流が制度的に明確に位置づけられていることを示すものと捉えられる。

この点に、治承・寿永内乱期以前にみられた在り方、すなわち家人や在京武士を介した配流の方式が、鎌倉幕府の下においては、一般重犯に対する処分として組織的に執行される体制にまで整備された様をみてとることができるのである。

むすび

流刑をめぐる鎌倉幕府法秩序は、治承・寿永内乱期以前にみられた武士社会の動向を、体制的に整備するかたちで形成された。その動向とはすなわち、京を結節点とする広域的な武士の移動と在京活動である。しかも幕府の場

合、流刑の対象が、広く一般重犯にまで及び、京内の治安維持をも担うことになった点は、公権力としての幕府の性格が如実にあらわれた結果であると評価できる。この点が、同じく家人が配流を担うとはいえ、平氏政権との間の大きな違いであるように思われる。

本稿は、佐藤進一氏や海津一朗氏に代表される、鎌倉幕府の流刑をめぐる諸問題について明らかにしてきた研究と、野口実氏や川合康氏の研究に代表される、とくに京と地方とを往来する広域的な武士の移動状況ならびに中央権力と東国武士との関係に注目した研究の両者を架橋する試みである。推測の域を出ない点や課題も多いが、本稿で示した視点を通じて、鎌倉幕府法秩序について今後にもさらに検討していきたい。

注

1 以下、鎌倉幕府追加法については、佐藤進一・池内義資『中世法制史料集 第一巻 鎌倉幕府法』（岩波書店、二〇〇一年）参照。

2 『薩藩旧記』所収の「薩摩国分寺文書」がおさめる北条泰時書状写には、承久の乱によって召人となった西面衆を薩摩国御家人鹿児島一族が本国薩摩へと配流した事が記されている（『鎌倉遺文』二九一一号）。また、『後藤文書』所収の寛元二年（一二四四）七月六日付、波多野義重書状写によれば、大番衆に護送されて鎌倉から上洛した召人が、さらに在京御家人と思われる後藤中務丞を通じて、西国へと配流されていることもわかる（『鎌倉遺文』六三四〇号）。なお、右に示した実例を含め幕府による流刑の全体像については、海津一朗「中世武家流刑の手続き文書——囚人預状を中心に——」（『古文書研究』三七、一九九三年）の研究に詳しい。

3 流刑に関するこれまでの研究は、①執行事例の収集・検討から古代・中世の流刑に関する基礎的事実を明らかにしようとするもの、②流刑地や流入への着目から日本の流刑のもつ特質や支配領域観について明らかにしようとするもの、③預制との関係に注目して中世流刑の実態やその執行手続きなどを武家政権の特質とともに明らかにしようとするもの、以上の三つの方向性に大まかに分類できる。①については、三浦周行「追放刑論」（同『法制史之研究』岩波書店、一九九一年）、牧英正「鎌倉幕府の国家的権力と幕府法の刑罰体系」（法制史学会編『刑罰と国家権力』創文社、一九六〇年）、義江彰夫「摂関院政期朝廷の刑罰裁定体系」（永原慶二ほか編『中世・近世の国家と社会』東京大学出版会、一九八六年）、同「日本律令の刑体系——基礎的考察——」（『歴史と文化』二一、一九

九〇年)、同「王朝国家刑罰形態の体系」(『史学雑誌』一〇四・三、一九九五年)、植田信広「鎌倉幕府の殺害刃傷検断について」(西川洋一ほか編『罪と罰の法文化史』東京大学出版会、一九九五年)などがあげられる。いずれも、自由刑としての流刑の機能や当時の刑罰体系のなかに占める位置・役割について検討している。近年では、古代の流刑執行事例を網羅的に収集・検討した山下紘嗣「奈良・平安前期の流罪に関する小考」(『年報三田中世史研究』二〇、二〇一三年)がある。②に関しては、固有法秩序の島流しとしての流刑が「ハラヘ」として伝統的に生き残り、継受法である律令の流罪を強く制約したことを指摘した利光三津夫「流罪考」(同『律令制の研究』慶応義塾大学法学研究会、一九八一年)や、流刑地への着目から境界支配のあり方や境界観について検討した遠藤巖「中世国家の東夷成敗権について」(松前藩と松前 九、一九七六年)、大石直正「外が浜・夷島考」(同「中世北方の政治と社会」校倉書房、二〇一〇年、初出一九八〇年)、永山修一「キカイガシマ・イオウガシマ考」(笹山晴生先生還暦記念会編『日本律令制論集下巻』吉川弘文館、一九九三年)、村井章介「外浜と鬼界島——中世国家の境界——」(『中世国家の境界と琉球・蝦夷』(同「日本中世境界史論」岩波書店、二〇一三年、後者初出一九九七年)、佐々木和美「中世流罪考」(『常民文化』二一、一九九八年)、築地貴久「鎌倉幕府『流刑地』としての東と西——その成立と展開——」(『文化継承学論集』五、二〇〇九年)などが代表的なものとしてあげられる。また、流人の処遇から当時の法慣習を明らかにしようとした上杉和彦「中世成立期刑罰論ノート——身体拘束を中心に——」(同「日本中世法体系成立史論」校倉書房、一九九六年、初出一九五五年)、清水克行「室町幕府『流罪』考——抹殺の法慣習——」(同「室町社会の騷擾と秩序」吉川弘文館、二〇〇四年)も、②の代表的な研究としてあげられる。③については、海津一朗氏による一連の成果がある。すなわち、前掲註(2)「海津論文および海津一朗A「中世社会における『囚人預置』慣行——西国地頭の村預けを中心に——」(『日本史研究』二八八、一九八六年)、同B「中世民衆の成長と抵抗」(『歴史学研究』五九九、一九八九年)、同C「囚人預状と九州悪党問題——『囚人預置』制の手続き文書——」(『内乱史研究』一二、一九九二年)である。

4 佐藤進一「増訂 鎌倉幕府守護制度の研究——諸国守護沿革考証編——」(東京大学出版会、一九八四年、初出一九七一年)、前掲註(2)「海津論文および註(3) 海津A・C論文」。

5 野口実「東国武士と中央権力——鎌倉政権成立史研究の一視点——」(同「中世東国武士団の研究」高科書店、一九九四年、初出一九八二年)、同「千葉氏と西国」(同著所収、初出一九九一年)。また、同「流人の周辺——源頼朝拳兵再考——」(同著所収、初出一九八九年)も、流人頼朝を圍繞する人的ネットワーク形成の背景として、京から下ってきた流人の存在に注目している。なお、武士社会における京の重要性・規定性を論じた野口氏の成果を中心にまとめた同「東国武士と京都」(同成社、二〇一五年)も公表された。

6 川合康「中世武士の移動の諸相——院政期武士社会のネットワークをめぐる——」(『メトロポリタン史学会編』歴史のなかの移動

とネットワーク』桜井書店、二〇〇七年)。

7 高橋昌明『武士の成立 武士像の創出』(東京大学出版会、一九九九年)。

8 元木泰雄『武士の成立』(吉川弘文館、一九九四年)。

9 長村祥知『治承・寿永内乱期の在京武士』(『立命館文学』六二四、二〇一二年)。

10 『群書類従』第二十六輯、雑部所収。

11 以下の考察においては、検非違使そのものもつ武力の問題について論じる用意が無いため、検非違使とその従者とは別に配流に
関与した武士についてのみに扱っている。検非違使尉に任官される武士や、検非違使の随兵といった存在をも含めて総体的な視点から
配流と武士との関係について考察せねばならないが、いまは今後の課題とせざるを得ない。

12 『玉葉』同月二十二日条。

13 『愚昧記』治承元年五月十六日、二十一日条。

14 『群書類従』第七輯、公事部所収。

15 なお、流刑執行の作法については、前掲註(3)上杉論文に詳しい。

16 延慶本については、北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語 本文編上・下』(勉誠社、一九九〇年)参照。文覚配流は、承安三年
(一一七三)五月十六日のことである(『玉葉』同年四月二十九日条、『百鍊抄』同日条)。なお『玉葉』『百鍊抄』によれば、北面に捕
らえられた文覚は、検非違使に下されている。

17 前掲註(5)野口『流人の周辺——源頼朝挙兵再考——』。

18 『清癡眼抄』所引「後清録記」永暦元年三月十一日条。

19 『平治物語』「頼朝生け捕らるる事」「頼朝遠流の事」。なお本稿においては、陽明文庫蔵本・学習院大学図書館蔵本(九条家旧蔵本)を
底本とする新日本古典文学大系の『平治物語』(栃木孝惟ほか校注『保元物語 平治物語 承久記』岩波書店、一九九二年)を用いる。

20 杉橋隆夫『牧の方の出身と政治的位置——池禪尼と頼朝と——』(上横手雅敬監修、井上満郎・杉橋隆夫編『古代・中世の政治と文
化』思文閣出版、一九九四年)。

21 希義について『平治物語』は、「駿河国かつらと云所に有けるを、母方のおち内匠頭朝忠と云者、搦とりて平家へ奉りしを、名字な
くては流さぬならひにて、希義と付られて、土佐国きらと云所にながされておはしければ、きらの冠者とは申けり」(『頼朝遠流の事』)
とする。当時九歳であった希義ですら名字がなかったとあるので、生後五十日余りの頼隆は当時、名字がなく、そのために朝廷の「流
人交名」にのぼらなかったのであろう。

- 22 「櫟本文書」所収、永暦二年四月一日付千葉常胤申状案（『平安遺文』三二四八号）。
- 23 菊池紳一・宮崎康充「国司一覽」（見玉幸多ほか監修『日本史総覧Ⅱ 古代二・中世一』新人物往来社、一九八四年）、野口実「十二世紀における東国留任貴族と在地勢力——『下総藤原氏』覚書——」（同『中世東国武士団の研究』高料書店、一九九四年、初出一九八八年）参照。
- 24 実定の検非違使別当在任期間は、永暦元年二月二十八日より同年七月二十四日までである（『公卿補任』）。
- 25 公能の右大臣在任期間は、永暦元年八月十一日より翌年八月十一日までである（『公卿補任』）。
- 26 前掲註（6）川合論文。
- 27 当時、「別当」とよばれる職をもつ「兼忠」という人物は、みあたらない。飯田悠紀子氏が指摘するように、文脈からいって、「別当」は検非違使別当を、「兼忠」は検非違使別当を務めた平時忠を、それぞれ指すのだろう（飯田悠紀子「平安末期内裏大番役小考」、御家人制研究会編『御家人制の研究』吉川弘文館、一九八一年）。
- 28 東京大学史料編纂所所蔵写真帳「仲資王記」（国立歴史民俗博物館所蔵、田中穰氏旧蔵典籍古文書所収自筆本）。
- 29 『山槐記』によれば、平兼隆の解官は治承三年（一一七九）正月十九日のことである（同日条）。なお、北条時政が平兼隆とともに伊豆へ下向したという話は、延慶本『平家物語』『曾我物語』『源平盛衰記』『源平闘諍録』のそれぞれにみえる。このうち、時政の上洛が大番役のためであったことを明記しているのが『曾我物語』『源平闘諍録』である。なお、以下、『源平盛衰記』についてふれる際は、改訂史籍集覧の『参考源平盛衰記』を用いる。
- 30 前掲註（6）川合論文、五一頁。
- 31 前掲註（3）義江「撰関院政期朝廷の刑罰裁定体系」、六九頁。
- 32 上横手雅敏「平氏政権の諸段階」（『中世日本の諸相』上、吉川弘文館、一九八九年）、五三二―五三三頁。
- 33 元木泰雄「藤原成親と平氏」（『立命館文学』六〇五、二〇〇八年）、二八頁。
- 34 『玉葉』治承元年六月二日、十八日条。
- 35 延慶本『平家物語』『成親卿流罪事』『成親卿被_レ失_レ給事』。
- 36 延慶本『平家物語』『丹波少将福原へ被_レ召下_レ事』、『源平盛衰記』『丹波少将召下』『信俊下向事』。
- 37 『玉葉』治承元年六月二日、十八日条。
- 38 妹尾や難波については、高橋昌明「平家家人制と源平合戦」（同『平家と六波羅幕府』東京大学出版会、二〇一三年、初出二〇〇二年）参照。

- 39 『尊卑分脈』によれば、宗綱は藤原伊長ともいい、相人であったことから「相少納言」とよばれていた。その相から、国を治めるべき人物である」と以仁王を宗綱が評した点については、『玉葉』治承四年六月十日条にみえる。
- 40 『玉葉』治承四年六月十日条、養和元年九月二十四日条、『吉記』養和元年九月二十一日条。
- 41 『吾妻鏡』寿永元年（一一八二）正月二十三日条、建久四年（一一九三）五月十日条。
- 42 『山槐記』治承三年十一月十七日条、『玉葉』同日条。
- 43 『兵範記』嘉応元年（一一六九）六月二十二日条、『玉葉』文治三年四月十日条。
- 44 『源平盛衰記』「兵衛佐催」家人一事。
- 45 正家の追却は、『玉葉』嘉応二年（一一七〇）二月三日条にみえる。なお撰関家の例については、元木泰雄「撰関家における私的制裁」（同『院政期政治史研究』思文閣出版、一九九六年、初出一九八三年）参照。
- 46 前掲註（4）佐藤著書、前掲註（2）海津論文ならびに註（3）海津A・C論文。なお、前掲註（3）植田論文の付表も、この点を考える上で参考となる。
- 47 平氏と検非違使庁との関係については、白川哲郎「平氏による検非違使庁掌握について」（『日本史研究』二九八、一九八七年）参照。
- 48 そもそも流刑は、広域のかつ一元的な支配を前提とした天皇を中心とする朝廷の専権事項であった。すでに前掲註（3）義江「撰関院政期朝廷の刑罰裁定体系」が指摘しているが、左遷を含むすべての朝廷配流は、天皇の勅裁という性格をもっている。ただし使庁は、住宅検断を通じて京内から罪人を追放していた。この点、拙稿「使庁における追放と財産刑の形成——住宅『壊取』を中心に——」（拙著『中世社会の刑罰と法觀念』吉川弘文館、二〇一一年、初出二〇〇四年）参照。
- 49 森幸夫「鎌倉時代の洛中警固に関する考察」（同『六波羅探題の研究』続群書類従完成会、二〇〇五年、初出一九九〇年）。
- 50 『都玉記』建久二年十一月二十二日条（『歴代殘闕日記』卷三十、『大日本史料』四一三）。
- 51 『吾妻鏡』建久三年六月二十日条。
- 52 御家人制整備の観点から大番役成立にふれた研究は多い。本論では主に、五味克夫「鎌倉御家人の番役勤仕について」（黒川高明・北爪真佐夫編『論集日本歴史4鎌倉政権』有精堂出版、一九七六年、初出一九五四年）、三田武繁「京都大番役と主従制の展開」（同『鎌倉幕府体制成立史の研究』吉川弘文館、二〇〇七年、初出一九八九年）、上横手雅敬「守護制度の再検討」（同『日本中世国家史論考』塙書房、一九九四年）、伊藤邦彦「鎌倉幕府京都大番役覚書」（同『鎌倉幕府守護の基礎的研究』論考編）岩田書院、二〇一〇年、初出二〇〇五・二〇〇六年）、高橋典幸「鎌倉幕府論」（『岩波講座日本歴史第6巻 中世1』岩波書店、二〇一三年）、木村英一「中世前期の内乱と京都大番役」（高橋典幸編『生活と文化の歴史学 第5巻 戦争と平和』竹林舎、二〇一四年）を参照した。

53 前掲註(49) 森論文、二六二頁。

54 建久二年三月二十二日付、後鳥羽天皇宣旨(佐藤進一ほか編『中世法制史料集 第六卷』岩波書店、二〇〇五年)。上横手雅敬「建久元年の歴史的意義」(同『鎌倉時代政治史研究』吉川弘文館、一九九一年、初出一九七二年)、杉橋隆夫「鎌倉前期政治権力の諸段階」(『日本史研究』一三一、一九七三年)、前掲註(49) 森論文参照。

55 上横手雅敬「六波羅探題の成立」(同『鎌倉時代政治史研究』吉川弘文館、一九九一年、初出一九五三年)、藤本元啓「鎌倉初期、幕府の在京勢力」(『芸林』三二―二、一九八三年)、前掲註(49) 森論文、木村英一「六波羅探題の成立と公家政権」(同『鎌倉時代公武関係と六波羅探題』清文堂、二〇一六年、初出二〇〇二年)、佐伯智広「一条能保と鎌倉初期公武関係」(『古代文化』五八一、二〇〇六年)、西田友広「幕府権力の生成と朝廷の対応」(同『鎌倉幕府の検断と国制』吉川弘文館、二〇一一年)。

56 『明月記』建仁三年十二月十五日条。

(付記) 本研究は、JSPS科研費二五八七〇六四五の助成を受けたものである。